

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 16 日現在

機関番号：34316

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26284064

研究課題名(和文) 日本語の多様な表現性を支える複合辞などの「形式語」に関する総合研究

研究課題名(英文) A Comprehensive Research on So-Called Formal Words and Morphemes, With Special Focus on Compound Particles that Allow for Rich Expressivity in Japanese

研究代表者

藤田 保幸 (Fujita, Yasuyuki)

龍谷大学・文学部・教授

研究者番号：80190049

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 5,200,000円

研究成果の概要(和文)：現代語の形式語に関して、いくつもの複合辞などの個別形式の意味用法をより掘り下げて解明するとともに、日本語の諸方言における形式語の用法や発達過程のケース・スタディを行い、また歴史的にも形式語がその意味用法を獲得する過程を個別のいくつかの形式について記述し、形式語が日本語の多様な表現性を支えるものとなっていることを、共時的・通時的・地理的な側面からそれぞれ実証した。併せて、形式語を共時的に考える新たな観点を提唱した。

研究成果の概要(英文)：With respect to modern language "so-called formal words and morphemes", we dig into the individual form of semantic usage such as multiple compound phrases in more detail and do case studies of formal words and developmental processes in Japanese dialects, and historically also describe the process of obtaining formal usage in several individual formats, and that the formal words is supposed to support various expressiveness of Japanese, verified each from the synchronic, diachronic, and dialectical aspect. At the same time, we proposed a new perspective to consider formal words synchronously.

研究分野：日本語学

キーワード：形式語 複合辞 文法化 形式名詞 コーパス 共時的条件 文法史 方言文法

1. 研究開始当初の背景

第一に、近年現代日本語の研究においては、大規模データ・ベースを活用したコーパス言語学の手法によるものが、大きな成果を上げつつある。このような研究方法を活用することで、「形式語」のような表現の、従来捉えがたかった個々の微妙な表現性は量的な側面からかなり客観的に記述できる。たとえば、事柄が時間的に並行して進むことをいう「～につれて…」と「～にしたがって…」のような形式語の表現の相違は、内省では説明が難しいが、コーパスを利用して用例分布を見ることで、かなりはっきりした傾向の違いがあることが浮かび上がってくる。本研究では、こうしたコーパス言語学の手法を積極的に活用し、「形式語」研究の新たな方法論を確立する。

第二に、近年の日本語研究では、標準的な日本語にとどまらず、方言・古典語との対照を視野に入れた研究が説得力を持つようになってきた。転成して生まれる「形式語」の研究においては、地域的・歴史的な違いや変化の様相を考えることで、より深く解明できる部分が多い。たとえば、現代日本語の「～という」のような形式語の表現は、引用や連体修飾のつなぎ、更には伝聞表現など、さまざまな用法が見られるが、方言では語形の上でさまざまな変異形が見られ、その使い分けもさまざまである。そして、実地調査を踏まえ、そのような変異の実態や使い分けを見ることで、こうした形式語の表現の特質が見えてくる。また、歴史的にも「～という」のような形式語の表現が実質的意味を乏しくして、「形式語」になってくる過程を記述することで、この表現の現代における用法の特質が説明できる部分は少なくない。このような研究の方向は、実り豊かな可能性があるが、実質的にはまだ緒に就いたばかりである。本研究では、「形式語」について、こうした方言・古典語との対照を積極的に進めていく。

第三に、従来積み重ねられてきた個々の「形式語」についての記述的研究は、まだ粗いものが多く、一層きめの細かい良質なものを更に積み重ねていく必要がある。より良質の個別研究論文をまとめ、今後の「形式語」研究の範例とする。また、今後の「形式語」の研究の基盤作りの一つとして、「形式語」の用例集をまとめて今後の研究の底上げをはかることも、本研究の目的の一つとしたい。以上のように、本研究は、コーパス言語学の手法と方言・古典語との対照の視点を積極的に取り入れながら、現代日本語の「形式語」についての記述的研究を、用例集も整備しつつ今一步レベルアップさせようとするものである。

先に研究代表者らは、平成 14 年～16 年度に科学研究費の交付を受け、基盤研究(B)として、「論理的な日本語表現を支える複合辞形式に関する総合研究」という研究課題で、「形式語」のうち複合辞(複合助詞・助動詞)

を対象として共同研究を行った。その成果は、平成 18 年度に『複合辞研究の現在』(和泉書院)として、刊行された。その後、この共同研究の成果の発展を意図し、複合辞に限らない「形式語」全般を対象を広げ、科研費の交付を念頭に置いてさらに共同研究を進めてきたが、その成果もかなり蓄積されてきたので、今般(平成 25 年 10 月)その一端を『形式語研究論集』(和泉書院)として、刊行した。しかし、こうした実績を踏まえて、研究を更に深化させる準備があり、科学研究費を得ることでそれは飛躍的に発展する。

2. 研究の目的

現代日本語では、「～について(<に+就く+て)」「～(スル)くせに(<癖+に)」といった複数の語が実質的意味を希薄にして結びつき、助詞・助動詞相当の語句に転成した形式(複合辞)や、「～(スル)限り」など、単一の語でも同様に実質的意味を希薄にして転成した形式が数多く見られる。こうした形式は「形式語」と呼ばれ、近・現代日本語に於いてとりわけ発達したものであって、現代日本語の際だった文法的特徴の一つである。従って、その研究は、現代日本語文法研究の重要課題であるが、個別の事実の記述においても、まだまだなすべきことは山積している。そこで、本研究では、コーパス言語学や対照研究の手法を活用して「形式語」研究を更に深化させ、形式語に関する基礎知見と研究の方法論を確立することを目的とする。

3. 研究の方法

まず、記述研究の対象の明確化を意図して、研究代表者らがかつて作成した『現代語複合辞用例集』などの記述の問題点を確認するとともに、複合形式以外の「形式語」をリスト・アップする。また、古典語の分野での「形式語」の研究とみなされる先行文献を調査し、その内容を整理する。次いで、以上の確認・整理を踏まえて、コーパス的手法・対照的手法・従来の記述的手法(必要に応じ、外国語との関係も視野に入れる)のそれぞれの方法に則って、ケース・スタディとしての研究を展開する。成果は、研究組織内の研究会で討議し共有する。そして、研究論文を集めた報告書として集約する。併せて、資料として「形式語用例集」、方言の「形式語」研究文献一覧及び古典語に関する「形式語」の重要文献解題を作成する。これらは、合冊した冊子の形で公表する。

4. 研究成果

(1)現代語の形式語について、多くの新知見が得られた。とりわけ、複合辞については、「～わりに」「～からして」「～となると」「～に比べて」「～拍子に」「～に至っては」など、従来研究がほとんどなかった形式について、その意味用法の詳細が明らかにされた。また、代表的な複合辞の一つである「～について」

に関して、その形態的なヴァリエーションととらえられがちな「～につき」と対比しつつ、その意味用法の分担の実態を明確に記述した。これらの各論的研究は、形式語の意味用法の記述的研究の一つの典型例を示したものと見え、今後の形式語研究の方法の一つの指針を示すものとなる。その他、「～(だ)からこそ」「～(だ)からか」「～(だ)からといって」といった類義形式や「～分」「～あげく(に)」、「～つもりだ」「～ものだ」「～ことだ」などについても、掘り下げた記述研究がなされた。こうした各論的記述によって、形式語(とりわけ、複合辞)の意味用法の記述の水準は、従来より一段階高まったといえる。

(2)また、形式語についての理論的考察も、新たな角度から行われた。形式語とりわけ複合辞については、「文法化」という観点からその存立が根拠づけられていたが、通時的な概念である「文法化」にのみ拠らず、現代語の研究においては、共時的な体系の中でその存立が根拠づけられなければならないという考え方が提唱された。これは、従来述べられることのなかった考え方であり、今後の形式語研究において、重要な観点となっていくものと考えられる。

(3)コーパスを用いた形式語の研究も、さまざまな成果を挙げた。とりわけ、(1)の現代語の形式語の個別記述においては、コーパスによる用例調査がいずれもその基礎資料となっている。、その他目立ったところでは、BCCWJや日本語学習者コーパス I-JAS などを使って、接続詞やアスペクト形式などに関する研究がなされた。また、コーパスの活用の重要性は言うまでもないが、研究の健全な発展のためには、その問題点の検証も不可欠である。今回の研究の一環としても、コーパスを用いた用例調査の問題点を明らかにするために、接続詞を例として、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の長単位「接続詞」の品詞情報の解析精度の調査・検証を行った。こうした検証は、今後の形式語研究の基盤整備として重要な意味を持つものである。

(4)方言研究に関わっては、特に共通語と方言にある引用表現由来の提題形式について、その用法や発達過程を対照し、引用と提題の意味・機能上の連続性を解明した。また、確認要求等に用いられる関西方言の「～ヤンカ」やアスペクト形式などの個別形式の意味用法記述も進められた。これによって、方言研究において形式語という観点からのアプローチの可能性と有効性が実証されたといえる。更に、日本語諸方言を「文法化」という視点から対照する試みも行われた。これは、形式語研究の立場から日本語の多様性を巨視的に俯瞰した試みであり、今後の研究に裨益するところの大きなものといえる。

(5)歴史的研究についても、いくつかの成果があり、とりわけこうした研究の基礎概念である「文法化」について、それを日本語に即して実証する結果が得られた。注目されるころでは、研究が手薄だった複合格助詞(しかも、「において」の連体形式「における」)の史的側面(具体的には明治以降)に光を当て、明治期以降の複合格助詞を研究する場合の基となる資料の選定をするとともに、研究のための時代区分を従来より細かく設定し、「における」が現代語のような連体の働きを得てゆくプロセスは、歴史言語学・あるいは社会言語学等で言語変化を示す際に指摘されるS字カーブを描いていることを明らかにするといった、手堅い各論的考察がなされた。こうした実証的な研究は、今後の形式語研究の一つのモデル・ケースとなるものである。

(6)主な成果は、研究論文を集めた冊子体の報告書として刊行した。この報告書には、方言の「形式語」研究文献一覧を掲載し、「形式語用例集」の作成見本版と古典語に関する「形式語」の重要文献解題(例)をも併せて示した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計40件)

(1)藤田保幸, 複合辞「～に至っては」について, 国文学論叢, 62, 279-301, 2017, 査読無

(2)藤田保幸, 複合辞であることを支える共時的条件について, 龍谷大学グローバル教育推進センター研究年報, 26, 1-10, 2017, 査読無

(3)生天目智美・高原真理・砂川有里子, 多義動詞としての「知る」と「分かる」の生天目智美・高原真理・砂川有里子 使い分けコーパスを活用した類義語分析, 国立国語研究所論集, 12, 63-79, 2017, 査読有, DOI/10.15084/00000854

(4)日高水穂, 漫才の賢愚二役の掛け合いの変容 ボケへの応答の定型句をめぐって, 国文学, 101, 79-96, 2017, 査読有

(5)藤田保幸, 複合辞「～となると」について, 表現研究, 103, 1-10, 2016, 査読有

(6)青木博史, 非変化の「なる」の歴史 本多論文への日本語史的アプローチ, 『日英対照: 文法と語彙への統合的アプローチ 生成文法・認知言語学と日本語学』274-281, 2016, 査読無

- (7) 青木博史, 語から句への拡張と収縮, 『日英対照: 文法と語彙への統合的アプローチ 生成文法・認知言語学と日本語学』408-422, 2016, 査読無
- (8) 青木博史, 日本語文法史の再構をめざして 「二段活用的一段化」を例に, 『日本語史叙述の方法』169-185, 2016, 査読無
- (9) 青木博史, 文献国語史の研究動向と方言研究との接点, 『方言の研究』2, 117-130, 2016, 査読無
- (10) 青木博史, 文法史の名著: 関一雄 『国語複合動詞の研究』, 『日本語文法史研究』3, 263-274, 2016, 査読無
- (11) 小西いづみ, 対照方言学研究的のこれまでとこれから, 『方言の研究』2, 99-116, 2016, 査読無
- (12) 砂川有里子, 書き手と読み手の対話, 『ヨーロッパ日本語教育』20, 8-18, 2016, 査読無
- (13) 塚本秀樹, 敬語表現と名詞指向性 日本語と朝鮮語の対照言語学的研究, 『名詞類の文法』143-163, 2016, 査読無
- (14) 馬場俊臣, 「だから」をめぐって 「しかしだから」「だからこそ」「だからか」「だからといって」, 『北海道教育大学紀要 人文科学・社会科学編』67(1), 1-14, 2016, 査読無
- (15) 日高水穂, 方言接触による授与動詞体系の変容 FPJD 調査より, 『国立国語研究所論集』11, 11-24, 2016, 査読有, DOI/10.15084/00000838
- (16) 藤田保幸, 引用形式の複合辞への転成について, 『國文学論叢』61, 307-321, 2016, 査読無
- (17) 藤田保幸, 複合辞「～からして」について, 『龍谷大学グローバル教育推進センター研究年報』25, 87-102, 2016, 査読無
- (18) 日高水穂, 述語制の表現体系から見る日本語諸方言, 『季刊 iihiko』129, 27-44, 2016, 査読無
- (19) 日高水穂, 近畿中央部方言におけるシテイル相当形式の動態 現在形と過去形の非対称現象をめぐって, 『国文学(関西大学国文学会)』100, 85-99, 2016, 査読無
- (20) 小西いづみ, 主体的表現者であるための地域方言・社会方言の学習, 『日本語学』35(2), 52-61, 2016, 査読無
- (21) 藤田保幸, 接続助詞的に用いられる「～あげく(に)」について, 『龍谷大学論集』486, 130-156, 2015, 査読無
- (22) 藤田保幸, 複合辞「～について」「～につき」をめぐって, 『日本言語文化研究』20, 20-48, 2015, 査読無
- (23) 藤田保幸, 「～に比べて」という言い方について, 『日本言語文化研究』19, 1-23, 2015, 査読無
- (24) 藤田保幸, 複合辞「～わるに」について, 『國文学論叢』60, 44-61, 2015, 査読無
- (25) 藤田保幸, 複合辞「～拍子に」について, 『龍谷大学グローバル教育推進センター研究年報』24, 59-74, 2015, 査読無
- (26) 青木博史, 終止形・連体形の合流について, 『日英語の文法化と構文化』271-298, 2015, くろしお出版, 査読無
- (27) 岡崎友子, 中古和文における接続表現について, 『コーパスと日本語史研究』71-92, 2015, ひつじ書房, 査読無
- (28) 小西いづみ, 富山市方言の「ナーン」: 否定の陳述副詞・応答詞およびフィラーとしての意味・機能, 『感動詞の言語学』115-131, 2015, ひつじ書房, 査読無
- (29) 砂川有里子, 連接の接続詞と談話構成力の習得 日本語学習者の横断的な作文コーパスを活用して, 『文法・談話研究と日本語教育の接点』288-317, 2015, くろしお出版, 査読無
- (30) 馬場俊臣, BCCWJ の品詞情報の解析精度について 特に接続詞に注目して, 『北海道教育大学紀要 人文科学・社会科学編』66(1), 13-29, 2015, 査読無
- (31) 山崎誠, 基本統計量に現れるテキストの特徴, 『日本語学』34(7), 78-83, 2015, 査読無
- (32) 青木博史, 室町・江戸時代の受諾・拒否に見られる配慮表現, 『日本語配慮表現の多様性』149-166, 2014, くろしお出版, 査読無
- (33) 青木博史, 接続助詞「のに」の成立をめぐって, 『日本語文法史研究 2』, 2014, ひつじ書房, 査読無
- (34) 岡崎友子, 指示詞再考 コロケーション強度からみる中古のコノ・ソノ・カノ+名詞句, 『日本語学』33(14), 139-150, 2014, 査読無
- (35) 岡崎友子, 現代語の指示詞コノ・ソノ・アノ+名詞句について, 『東洋通信』51(5),

77-92, 2014, 査読無

(36) 岡崎友子, 「カカレバ・サレバ」の歴史的用法と変化について, 文学論叢, 89, 1-21, 2014, 査読無

(37) 砂川有里子, コーパスを活用した日本語教師のための類似表現調査法, 日本語/日本語教育研究, 5, 7-27, 2014, 査読無

(38) 日高水穂, 近畿地方の方言形成のダイナミズム 寄せては返す「波」の伝播, 『柳田方言学の現代的意義 あいさつ表現と方言形成論』, 245-264, 2014, ひつじ書房, 査読無

(39) 三井正孝, 列島縦断! 日本全国イチオシ方言 茨城県 「ごじゃっぺ」「しっぱね」, 日本語学, 34(2), 84-85, 2014, 査読無

(40) 山崎誠, 品詞・語種の割合とテキストのジャンルとの相関, 日本語学, 33(8), 86-94, 2014, 査読無

〔学会発表〕(計 18 件)

(1) 藤田保幸, 複合辞「～にいたっては」について, 第 114 回国語彙史研究会, 2016 年 12 月 3 日, 大阪大学(大阪府豊中市)

(2) 青木博史, 「です」の文法化, 第 1 回「日本語と近隣言語における文法化」ワークショップ, 2016 年 11 月 27 日, 東北大学(宮城県仙台市)

(3) 中島孝幸, 形式名詞「つもり」と意志表現 中国語との対照, 第 75 回中部日本・日本語学研究会, 2016 年 11 月 5 日, 刈谷市総合文化センター(愛知県刈谷市)

(4) 青木博史, 歴史語用論研究の可能性 <ワークショップ: 行為指示表現の歴史語用論>, 日本語学会 2016 年度秋季大会, 2016 年 10 月 30 日, 山形大学(山形県山形市)

(5) 砂川有里子, I-JAS を使った非流ちょう性の研究, 日本語音声コミュニケーション研究会, 2016 年 10 月 7 日, ひめぎんホール(愛媛県松山市)

(6) 砂川有里子・マドナーめぐみ, 東京新聞社説に見られる文体シフト, 第 29 回日本語教育連絡会議, 2016 年 8 月 26 日, アンドリッチグラード(セルビア)

(7) 砂川有里子, ワークショップ「コーパスを活用した語彙の意味記述」, 9th International Conference on Practical Linguistics of Japanese, 2016 年 6 月 4 日, サンフランシスコ(米国)

(8) 江口正, 九州方言における二段活用の残

存と終止形の立場, 筑紫日本語研究会, 2015 年 12 月 28 日, 九州大学文学部(福岡県福岡市)

(9) 砂川有里子, 日本語学習者コーパスの構築と研究の可能性について, 第 28 回日本語教育連絡会議プログラム 2015 年 8 月 24 日, ザグレブ(クロアチア)

(10) 江口正, 大分市方言の終止形の異形態『ン』について, 筑紫日本語研究会, 2015 年 8 月 11 日, 九州地区九重共同研修所(大分県玖珠郡)

(11) 青木博史, 連体形による文終止の一般化 <ワークショップ: 日本語の構文と構文変化>, 日本語学会 2015 年度春季大会, 2015 年 5 月 24 日, 関西学院大学(兵庫県西宮市)

(12) 青木博史, 文献国語史と方言研究の接点 <シンポジウム: 方言研究の過去・現在・未来>, 日本方言研究会第 100 回研究発表会, 2015 年 5 月 22 日, 甲南大学(兵庫県神戸市)

(13) 砂川有里子, 名詞述語文の習得に関わるねじれ文と「は」と「が」の誤用について 学習者の縦断的的作文コーパスの分析から, 第 139 回関東日本語談話会 2015 年 5 月 9 日, 学習院女子大学(東京都豊島区)

(14) 砂川有里子, 談話構成力の習得と接続詞の接続範囲 第 6 回談話分析コロキウム 2014 年 12 月 23 日, 山形テルサ(山形県山形市)

(15) 砂川有里子・李在鎬・高原真理, 日本語学習辞書支援のためのデータベース構築, AJE ヨーロッパ日本語教育シンポジウム, 2014 年 8 月 30 日, リュブリャーナ(スロベニア)

(16) 砂川有里子, 学習者作文コーパス LARP at SCU 接続詞のパイロット調査, 第 27 回日本語教育連絡会議, 2014 年 8 月 23 日, パラトン(ハンガリー)

(17) 堤良一・岡崎友子, ソ系(列)指示詞の記憶指示用法について, 日本語学会 2014 年度春期大会, 2014 年 5 月 18 日, 早稲田大学(東京都新宿区)

(18) 竹内史郎・岡崎友子, 日本語接続詞の捉え方 ソレデ、ソシテ、ソレガノヲ、ソコデについて, 日本語学会 2014 年度春期大会, 2014 年 5 月 18 日, 早稲田大学(東京都新宿区)

〔図書〕(計 10 件)

(1) 藤田保幸(編)『日本語の多様な表現性を支える「形式語」に関する総合研究 研究成果報告書』(研究成果報告論文 15 編他を収め

る) 2017, 229 + 10 頁

(2)山崎誠,『テキストにおける語彙的結束性の計量的研究』,2017,和泉書院,244 頁

(3)早津恵美子,『現代日本語の使役文』,2016,ひつじ書房,464 + 13 頁

(4)青木博史,『日本語歴史統語論序説』,2016,ひつじ書房,280 頁

(5)青木博史・小柳智一・高山善行編,『日本語文法史研究 3』,2016,ひつじ書房,320 頁

(6)岡崎友子・森勇太,『ワークブック日本語の歴史』,くろしお出版,2016,132 頁

(7)藤田保幸,『引用研究史論 文法論としての引用表現研究の展開をめぐって』,2014,和泉書院,453 頁

(8)青木博史・小柳智一・高山善行編,『日本語文法史研究 2』,2014,ひつじ書房,298 頁

(9)沖森卓也・曹喜澈(編著),塚本秀樹他著(以下7名省略,6番目)『日本語ライブラリー 韓国語と日本語』,2014,朝倉書店,152 頁

(10)山崎誠(編),『講座日本語コーパス 2 書き言葉コーパス 設計と構築』,2014,朝倉書店,164 頁

6. 研究組織

(1)研究代表者

藤田 保幸(FUJITA, Yasuyuki)

龍谷大学・文学部・教授

研究者番号: 8 0 1 9 0 0 4 9

(2)研究分担者

青木 博史(AOKI, Hirofumi)

九州大学・人文科学研究科(研究院)・准教授

研究者番号: 9 0 3 1 5 9 2 9

江口 正(EGUCHI, Tadashi)

福岡大学・人文学部・教授

研究者番号: 2 0 2 6 4 7 0 7

岡崎 友子(OKAZAKI, Tomoko)

東洋大学・文学部・教授

研究者番号: 1 0 3 7 9 2 1 6

小西 いずみ(KONISHI, Izumi)

広島大学・教育学研究科(研究院)・准教授

研究者番号: 6 0 3 1 5 7 3 6

砂川 有里子(SUNAKAWA, Yuriko)

筑波大学・名誉教授

研究者番号: 4 0 1 7 9 2 8 9

塚本 秀樹(TSUKAMOTO, Hideki)

愛媛大学・法文学部・教授

研究者番号: 6 0 2 0 7 3 4 7

中畠 孝幸(NAKAHATA, Takayuki)

甲南大学・文学部・教授

研究者番号: 0 0 2 1 7 8 1 1

馬場 俊臣(BABA, Toshiomi)

北海道教育大学・教育学部・教授

研究者番号: 7 0 2 1 8 6 6 8

日高 水穂(HIDAKA, Mizuho)

関西大学・文学部・教授

研究者番号: 8 0 2 9 2 3 5 8

三井 正孝(MITSUI, Masataka)

新潟大学・人文社会・教育学部・准教授

研究者番号: 6 0 2 4 9 2 4 0

山崎 誠(YAMAZAKI, Makoto)

大学共同利用機関法人人間文化研究機構
国立国語研究所・言語変化研究領域・教授

研究者番号: 3 0 1 8 2 4 8 9

(3)連携研究者

田野村 忠温(TANOMURA, Tadaharu)

大阪大学・文学研究科・教授

研究者番号: 4 0 2 0 7 2 0 4

丹羽 哲也(NIWA, Tetsuya)

大阪市立大学・文学研究科・教授

研究者番号: 2 0 2 2 8 2 6 6

服部 匡(HATTORI, Tadasu)

同志社女子大学・表象文化学部・教授

研究者番号: 4 0 2 2 8 4 9 0

早津 恵美子(HAYATSU, Emiko)

東京外国語大学・国際日本学研究院・教授

研究者番号: 6 0 2 2 8 6 0 8

(4)研究協力者

大島 資生(OSHIMA, Motoo)

小田 勝(ODA, Masaru)

山東 功(SANTO, Isao)

杉本 武(SUGIMOTO, Takeshi)

高木 千恵(TAKAGI, Chie)

高橋 雄一(TAKAHASHI, Yuichi)

田村 幸誠(TAMURA, Yukishige)

辻本 桜介(TSUJIMOTO, Osuke)

松丸 真大(MATSUMARU, Michio)

茂木 俊伸(MOGI, Toshinobu)

森山 卓郎(MORIYAMA, Takuro)

矢島 正浩(YAJIMA, Masahiro)